

# 川柳雜誌

第二卷 第二號

大正十四年二月十五日發行  
（一月一號）  
（一月十五日）  
（一月三十日）

川柳雜誌  
（十三號）

洛西太秦  
牛まわり



鳥手

川柳雜誌 第二卷 第二號 (大正十四年三月十五日發行) 目次

近作

川柳略語解遺補

麻生路郎 (一)  
西原柳雨 (七)

句になる迄 (四)

遅日莊主人 (五)

噫 零骨

麻生路郎 (三)

嬉しい事悲しい事

柳川洲馬 (三)

小嘶大學

春夏秋冬生 (四)

川柳塔

(六)

松郎、幽、一聲、柳骨、柳路、助六、麟翠、姜の作、徹底郎、幸堂、葵豆、かほる、馬行、二柳子

募 試合

井上劍花坊選 (一八)

集 掛取

岸本 水府選 (一八)

句 梯子

柳川洲馬共選 (三)

竿 竹

高橋古城山共選 (三)  
橋本二柳子  
森田輝翠共選 (三)

一週年記念川柳大會

二柳子記 (四)

近作柳樽

麻生路郎選 (三)

零骨なる雅號

岩崎柳路 (三)

其後の半六君

黒木葵豆 (二)

洛西太秦半まつり(表紙)

吉岡烏平

編輯後記

二柳子 (一〇)

# 川柳雜誌

第二卷 第二號

近作

麻生路郎

解決を支那料理までもつてゆき

太藝者旦那一人に生きんさす

これ以上には瘦せられぬ瘦せられぬ

裏切つて見たが矢つ張り運轉手

襦衣一枚出来ぬくらしを續けて來



# 個人句集に就て

石井省 二一

漱石全集を繰返し繕ひて、其俳句集に至り編輯者の苦心の程が窺はれる。今度子規全集が出版されて、子規の句は遺憾なく網羅されるが、子規の如き明治俳壇を風靡した俳人の句集でも吾人の書齋に飾られる迄には容易の事でない。明治四十一年秋、瀬川疎山氏編の百六十頁許りの、ザラ紙に印刷された、お粗末な『子規句集』と名付けるものが、先づ最初であるらしく題言の一節に、

真頃子規の言行録や隨筆などは出版されたが句集は出版されない。俳人としての子規歿後其家集の刊行されぬを遺憾に思ふて居た時人に進められて一の分類集を編纂した。其れは句も二千餘、題句を寧ろ頼み印刷に着手したのは三十六年の暮であつた。然るに間もなく戦争が始まつて印刷を繼續されぬ事情が起つた。…所が今日に到つても矢張り何處からも出

版されない、よつて再び編纂を改め四千句許りを收め、斯くの如く出版する事とした是が計畫してから六年目丁度子規の七回忌に出る事となつた。

相應難産の出版物なのである。古人は當時の思潮風習に因り自家の集を編むのを遠慮した傾向があつて、僅かに手記位はあつたらうが之れとても氣紛れに過ぎなかつたから、其歿後は日夕膝下に仕けた門弟に依り散逸したる文書をあさつて蒐集されるので場合では遂に見出す能はぬ句も多い、況んや一昨年の大震災火災の不幸に際會しては、全く世に出づる機を失つてしまふ。

近時の出版界の隆昌と作家の主張に因り、個人句集の編纂刊行が寧ろ流行しても言ふべき域に達したのは、慶賀に堪ぬ次第であるが夫れは川柳界の事實ではなく、お隣の畑の話なので

ある。昔の昔に三箇子句集とか卯木句集なき出た事は出たが指を屈すれば足るでお恥しい遺憾千萬の事である。川柳は個性の詩でないから社會民衆詩であるから、個人句集の必要はない。か、古柳樹を見ても作者名の知れざるもの多きは個性或は個人の名譽を没却し了した點に川柳の生命が、客観的社會的にあるのだ。さういふ論議は、殊更に反對せむが爲めの反對意見で自分は反駁の要を認めぬ。個人句集が出版されて柳壇に社會に響きがあれば、夫れは川柳詩の尊さである、先進の上は努めて家集を發表して頂きたい。

曩頃自分は明治柳壇の實際運動者としての久良岐劍花坊朴山人三氏の句集位は同じ道を樂しむ一人として欲しいものだ、又出版して置く義務も感せられたのであるが、幸に劍氏は綿密なお方ださるる全部ではないが、自選句集を出版して居られる。今後も漏れたものを一纏めに致し置かれ度い希望する。朴山人氏は故人であり語彙系の始祖で當時は新川柳の第一期であつたから、氏の句を今日より批判すれば聊か幼稚とも見受けられるが、川柳發達史の資料として無くてはならぬから、衣鉢を繼がれた而笑子氏に照會した。

(一) 朴山人氏の句集ありや——句集して別に出版され居らず  
(二) 將來出版計畫ありや——無し遺族の居所不明のみならず遺稿もなかるべし

一言ふお答を得た、古い讀賣新聞の圖書目録に、朴山人編の「川柳抄」ミか「へなぶり」ミかの書名が留められ、氏の句が載せられてあるが何れも絶版のもので、而笑子氏も川柳抄だけ一部所持致し居り候とあつた。即ち機運に會しなば是非自家集を後進の爲めにも編纂して置いて頂きたい。所以で、讀賣系の川柳家に因り雜誌の附録としてゞも集め得られる丈けの印刷をお願ひ申上げて置く。

自分は尤も密接なる關係のある久良岐氏の句集を編輯するの要を多年感じて居るので、東京生活の折り一二の柳友に計つた處、某君が矢張り此事に心をひそめ一時熱心に蒐集したが其後更だ姿も見せぬミの事で、折柄大震災あり避難民として自分は東京を去り心平かならず、一書を剪して岐氏の意見も叩いた、左に掲ぐるは舊臘十七日附の回答で岐氏一流の抱負もあり、抜記しやう。

久良岐句集なきは蓋し未の末で川柳の真意が社會に理解が出来れば吾人の目的が達したわけで社會即詩にならなければ、一私人久良岐の句なきはさうでもよいのです。古の乞食が「物持たぬ袂は輕し夕涼み」言つて拾つた財布の返禮をうけなかつた事、許由が瓢を川へなけうつた事や、君去試看江上路風花雲月總吾文ミ咏じた天保度の漢詩人の心が私の川柳心であります。個人の句集は最後の鬮餘の一手段であります

これは個人句集の刊行に反対された意見ではないので、翌日再び一書が来た。

久良岐句集や全集は一寸問題です。私は作句家でなくして古句研究家古句宣傳家社中教育家が事業の十中八九で私一人で作句を樂しまうさいふ心持になつた事が少ないからであります。併し最近の作句を集めて小冊子を作り度い考もあります。が……小子の作句は一番「花束」が多くあります。

現岐社中諸君の奮發努力を俟たう。句集は自選が第一である、これは説明を要しない事であるが、例へば大阪方面から出る雜誌の一家吟三句會席上吟を比較するに大家の作品にも徑庭を認められる、一方は推敲に推敲を重ね一方は時間其他の事情上作りツ放しの折りもあつて、活字に發表された後作者自ら抹殺し度い思ひのするものがある。或は後日は捨てる氣で即興的に作句したもの、發表する氣でなくして手記して置いた句なきが、作者が故人になつた場合選句者編輯者に依り全部網

羅される事は、非常な迷惑で人格を毀損するものと言はねばならぬ。即ち選句者は作句者以上の責任ある立場に在るので、自選句集なれば未定稿のもの意中のもの悉く選別して快心の句集が後世にも問ひ得るゝわけであるから、お互ひに骨を折つて置き度いものである。

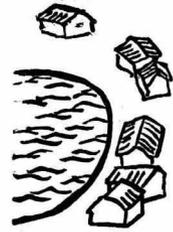
前に引例した疎山氏の「子規句集」は子規も晩年には作句悉が名吟云ひ難きも捨て難い句許りを作つた起點の結果であるふ、然るに明治三十年の作には随分幼稚なのや平凡なのが多かつた。で此句集へ採録する場合にも編者が捨てたのも亦決して少數でない、併しつめて多くを探る事としたそれは必ずしも佳句でなくとも子規にも斯かゝる句ありしか子規の趣味着想叙法即ち作句振か斯くも多方面なりしか後學の參考に供せんしたからである。即ち子規の佳句秀吟を集めたものではなく子規の駄句惡吟を除いた丈の飾りなき子規句集である。云ふ態度は選句者にして尤も穩健なるものである。

△ 零骨が死んださうです寒いこ

△

自動車の毀様實は迎ひ也  
運轉手うしろの痴話が氣にかゝり  
待たうかな歩いた方が早いかな

池澤樂居  
武笠山椒



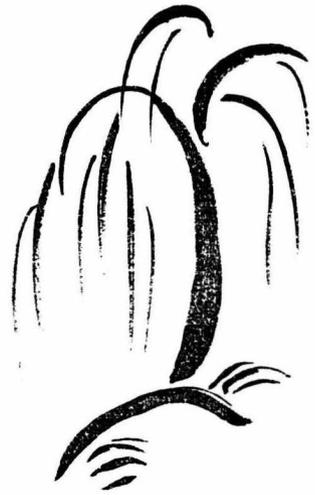
# 句になる迄 (四)

前號近作柳樽より  
遅日莊主人

川柳の選をしてゐる時、同じく作家でも、階段的に何處までものびてゆく作家と或る所まで行つて少しも進境を示さない作家とあることに氣づく。これは勿論作家の素質にもよるのであるが、多くは川柳とはこんなものであつたといふ概念的な作家に墮してしまふからである。そんな作家に限つて可成り器用ではあるがその器用さが作家としての彼を尤も危険に導くのである。作句に對する精進を忘れることは作家たるの前途を阻むからである。そんな作家でも常に自分の過去の句に類はされぬやうに心がけねばならない。そして未墾の畑がウンとあること心づかねばならぬ。國木田獨歩の所謂いつも赤ん坊の心をもつて新しい境地へ

志さねばならない。セルロイドの玩具でも捲へるやうな調子で型に入れた川柳を作つてはならぬ。そんな川柳が巧になればなるほど所謂川柳らしい川柳が數多く出来るだけであつて、作家としての独自の境は永遠に來ないのである。  
『近作柳樽』の各作家の句を引き續いて見てゐると、各作家の句の上の一進一退が非常に面白く感じられる。一進一退といふことは句數の多く掲載されるといふことを意味するのではなく、句の價值についての話であることは云ふまでもない。前號の『近作柳樽』を讀んで特に自分の注意をひいた二三の句をあけて見る。  
(一)あの人好きよに驚く父と母、馬行  
(二)男は話もさせぬつもりなり 久樂

(三)妹が遊びに來るに手傳はせ 論笑  
(一)は時代の心がこの若い作家の脳裡を透して解剖せられた感がある。自分等では相當新しいと思つてゐる父母でもいつかは若いものゝ心に徹底し得られないことを巧に描寫し得た句だと思ふ。そしてこの句の表現は川柳本來の十七字形から云へば字足らずではあるが決してリズムを破つてはならない。寧ろ特異な感じを調子の上からも感ぜしめる手腕をもつてゐる。  
(二)は前者と同じく親心を詠んだものではあるが前者とは違つて娘を全然こきも扱ひにし、親としての持ち物である云つた頑強さが表れてゐる。しかし子に對する盲目的な愛はこの方により多く見ることが出来ると思ふ。  
(三)は兄弟姉妹としての愛の境地を何の奇もなくして實に巧に表現してゐる。斯うした句に對してゐると、句の持つ魅力が云つたやうな言葉が何處からか生れて來て考へさせられるのである。



# 川柳塔

◇ 塚崎 松郎

藝術に生きて腰をかいてゐる  
手紙書く間もないのかと叱つて來  
小遣ひが有るか云へばお辭儀をし  
そこくくに片付けて事務退けるなり  
上かん屋男優りの嫁を持ち  
丁寧へだてして去ぬ小間物屋

笛ばかり吹く逦査とはなりにけり  
大降りにもならず戸樋をポツンく  
白粉の瓶たまるこまたまるこま  
吹降りの中を丁稚さいふ身分  
通過した後のレールに月を見る  
日の丸を出して亭主の役が濟み  
もう歸るのかと淋しい顔で立ち

俺ばかり責めるなと頼馴でゝゐる  
交番に何をか詫びる半づほん  
なぐさめてやればうなづく許りなり  
空腹をぢつとこらへて女氣の  
山近き灯のまたゝきが映る窓  
白粉をつけて狂人哀れなり  
ある時は病氣と云ふて寝に上り

◆ 關本雅幽

また抱いて泣かれる若いお父さん  
零骨氏を悼む  
さんくミ粘野へ君は急ぐなり  
さらば君又何處かでミ言ひ度いが  
◆ 太田一 聲  
揃はない服新兵ミ見られたり  
新兵にやうやう馴れて出す手紙  
怪我だけでまだよかつたミ諦らめる  
新内をしんみりミ聞く絹蒲團  
梳髪に少うしほしい脊丈なり  
肩車半分だけの目で歩き  
一錢の駄菓子に便所借りられる  
寝るだけの二階借りへも日は當り  
魚屋を呼び止めて居る病上り  
瘦せて居る車掌へ力士もたれかけ  
晴天に座敷へ傘を丸く干し

抽斗がつまつて妻へハツ當り

◇ 高見 柳 骨

嫁入の支度くゝ十八九  
心よく受けてくれたミ懸念がり  
學校をさほつて來てる二人連  
意思だけを残したまゝに主義者死に  
いゝ物を貰へば歸る女の子  
お祈りが家一杯に聞こへてる  
正月に襟を折らにやミ笑はれる  
靴下の破れ上らぬ氣で出かけ  
弟子連れて恵方へ詣る請負師

◇ 岩崎 柳 路

花の散るやうに名妓は落籍れて  
荷廻りの車の奥に立志傳  
中將湯も持つて新妻里歸り  
學習院お供へお供ついて來る

銀ぶらの澄子は眼鏡なきを掛け

金色夜叉の序幕のやうな加留多會

搖れる方へわざミ揺つてる運轉手

電話で聞いた話ミ會へばちミ違ひ

◇ 松本 助 六

張りボテへ日射しのまぶい麗かさ  
老ほれて大工大工の味がぬけ  
角帯がゆるんで道が近くなり  
花道の捨兒へ雪のかゝる事  
其中の一人皆んなの旅費を出し  
チンチコは電車で邪魔な客にされ  
母親の事から子守泣き初め  
子守子守朝の日射しへ寄つて來る

◇ 森田 輝 翠

なる程ミ聞くは意見でない話  
まだ今朝の寒さの儘に晝ミなり

覗き込む顔へ手仕事糊を付け  
年若く見へて會議に侮られ  
唯生きるだけにあんまり汗をかき

◇ 駒井美の作

氣の折れた親に棺桶二つあり  
早寢して一つ家程の風を聞き  
白酒を娘娘の酌で呑み  
合宿の双方飲めて面白し  
暑温器なまめかしくも胸を見せ  
山門を出て二二三丁松の風  
酔はされて來る三年増のよくのろけ  
富田屋も暇な噂の長火鉢  
立關迄送るに仲居肩を貸し  
落籍されて住めば淋しい天下茶屋

◇ 太田徹底郎

子供等の嗜着は無事に年を越し

空想の十萬圓は物足らず  
不眠症子供起して見たくなり  
過去帳を一枚汚すだけのこゝこ  
衝動もなく新年となりにけり  
雑煮箸鑑定さいふ型で抜き  
綱引に負けかける様に落ちて行く  
溝板の音に驚く大晦日  
治らぬさ云ふては呉れぬ人ばかり  
氣がついて見れば違つた醫者も居り

◇ 二木幸堂

挑割がうつるだらうに交換手  
硝子戸で一掃なでる女事務  
工場へ追ひつめられた蝶々にて  
露國へでも行かうか職工職工  
あちらからこちらからちらりさする氣持

◇ 黒木英豆

をぢちやんの馬鹿ミ膝から言はたて居  
たまくに拂ふて廻るこゝろよさ  
妹まうほんこのこきを言はぬなり  
懐がよくてドシシコミ惚れてゐる  
はつこして無駄骨折らぬ年になり  
やゝあつて抜目をみせぬ口をきゝ  
没落は風呂のタオルの沈む如  
勝つたのが賢い顔になる將棋  
泣いてゐるぢつさうして泣いて居よ  
泣いてゐる目でながめてゐる掌  
涙なみだたよりに思ふものもなし

◇ 高橋かほる

研き屋く濁つた水で平氣也  
かり橋で面白く見る家の横  
隈取りは年に一度の成駒家  
◇ 林田馬行  
斷髪をすゝめた人へ見せに來る  
或時は父ミおほしき子守唄  
恐ろしき人ミ聞き居り母こゐる  
机の上の鏡に獨りゐる部屋  
逢ふてゐるばかりミ見ゆる日記帳  
素直なも淋しきうちぞ許嫁  
我家の習なま慣母に盡きんミす  
長生きを母にすゝめて箸をこり  
◇ 橋本二柳子  
赤貧に娘の品ミ云つて居れず  
都へミ來たが木綿のまゝで居る  
出稼にもう三月ミ言ふ灯  
提灯ミ仲の音が近くなり  
歌もつたまゝ、蒸籠車をながめて居

# 其後の半六君

金を拾つた話の筆者 黒木 茨豆

木村半六君は金を拾ふので最近有名になつた男であるが僕の知る範圍では金を拾ふよりも失戀の方の大家である。最も半六君は失戀ではない不得戀だ云つて失戀家云はれちこゝを大變嫌がるのも道理で彼れは足掛け六年このかた一人の職業婦人に戀を續けてゐるのである。彼れはその戀のためにさんぐに貧乏をしてそれ以來の彼れは喰ふのにも困つてゐるやうな様子である。何も喰ふのに困つてまで女に戀をするやうな非現代的な理屈に合はないこゝを必要はすこしもないではないかといつて僕等はよるささはるご攻撃をしたものだが、ちミ頭の狂つた半六君は少しも耳をかさなかつた

のである。戀は熱病である昔から云はれてゐるから今にさめる時が来るだらうといふので友人等はひそかに其時をまつてゐるが半六君の熱病は一年経つても二年経つてもさめなかつた。そのうちに熱病の疲は顔色にも、懐具合にもあらはれて來た。秋のもの淋しい日なごよく私の内へもやつて來て少しやさしいこゝでも云ふてやると二日でも三日でもメソク、ミして動かぬ。まあおかしい話だが戀病といふのが實際あるこゝは半六君によつてはつきりみせて呉れた。人より肥てゐた彼れが三貫目餘りもやせて元氣のない蒼い顔でゐるので、そのころから心配になりだした僕は、かう熱病が長續きする

のは相手もきつミ氣の弱い女で意氣地なし同士でよくしてゐるのだらう。これは一つ仕方がないから夫婦にしてやらうつてな意氣込みで或る日出かけて行つてその女に逢つて當つてみるミ「へね、まあおかしな方ですはね、妾なんにもさかしまへんけさあんな陰氣な人きらひですは」ミいつてニツコリミしてみせた。「オイ君悪いこゝは云はないから素人の女を貰つて一族揚げ給へ。僕も及ばず年ら出來るだけの盡力をするから……君今がお互ひに一番大切な時節だから……」ミ泣いて僕がいふミ「君は僕の戀人に逢つたな……女が僕がきらひだと言つたたら……」ミ悄然ミして「それはよく判るけれどもさらはれるから戀が出來ぬといふ眞理はない」ミ重々しい口調でいつた。それからさも深いものを考へるやうな顔で「僕にはすべてが判つてゐる」ミいつて半六君は夢遊病者のやうな譯のわからぬドロンミした目になつた。



# 噫 零 骨

麻 生 路 郎

南海の太田一聲君から一月十三日に酒井零骨君（九）が亡くなった事を知らして来た。引き續いて庶務課長の池澤樂居氏から「零骨君が死んださうです寒いこゝこゝいふ句を寄せられた。そして『追悼川柳會でも催してあけて下さいませ』と追記してあつた。

零骨君が悪いといふこゝこゝは知つてゐたが、まさか斯う急に亡くなるやうな事はあるまいと思つてゐたので私は愕然として驚いた。その中に見舞に行かうと思ひながら、自分も身體を悪くしてゐたので、さうく見舞にも行かないうちに永久の別れをしなければならぬこゝこゝになつてしまつた事を實に残念に思つてゐる。

私はかつて零骨君が病氣の故をもつて同人を一時やめさして貰ひますと云つて来た時に、實に暗い淋しい感じに襲はれたので早速、同人名簿から君の名を削るにしのびぬからそのまゝ置

いてもよからうと云つてやつたところが、僕は死ぬまで川柳はやめたくないが、醫者の勸告もあり、家族や親戚の手前でも是非同人の名を消して貰ひたいと重ねて云つて来たので、遺憾ながら同君の意思に従つた。が私はいつか再び同君が同人として活躍してくれることを期待しながら雑誌の校正の日に印刷屋の暗い机に向つて『曇れる日に』の一文を草して彼を慰めやうとしたのであつた。が、それも紙数の都合で私の『曇れる日に』は載せることが出来なかつた。今にして思へば、その一文をせめても同君が生前に見せてやりたかつたと思つてゐる。

零骨君が川柳に親しんだ日は僅に一年あまりであつたと思ふ私が選をしてゐる日々柳壇に投句して来てよく没になつたこゝこゝを後に川柳雑誌社の同人になつた時に話し合つて笑つたこゝこゝがあつた。しかし句に熱心であつた事は實に驚くべきものがあつた。川柳塔でも毎號がさすに句を送つて来たが常に百二十

句から二百句に近い句をあの忙がしい仕事の中から送つて来たのであつた。先生僕は女房を質においても川柳は止めません。あのおまなし零骨君が豪語してゐたことを思へば、零骨君が川柳から退くことのために、されだけ煩悶したか知れないであらうと思ふ。私は考へても涙が出て来る。もう少し生かしてやりたかつたと思ふ。

零骨君は作句に於て白熱的であつただけに、句の上の進境の速かであつたことは、實に驚くべきもので、僅に一年や二年にして達し得べき境地の句でなかつた。私はそれを思ふと同君が同人を止めた事に對して何時でも残念に思つた。

しかし、それも仕方がなかつたので、早く快癒してくれる日ばかり待つてゐたのに、あゝ零骨君は遂に起たなかつた。

同君の句には愛に充ちた句が多かつたが左記の各句の如きは實に三誦に値する句であると思つてゐます。

私達は寄るこ、よく零骨君の

ほろ／＼として小兒科の扉をあけ

の句を誦したものであつた。これから後幾年かこの句を誦して零骨君を偲ぶことであらう。(二月八日夜)

エナメル靴おそろひた様にふき

妾宅へ早や張り込みの手は廻り

仁丹が轉ぶ座敷の青疊

もう閣下主治醫を話す様になり  
俠氣を出すに女房に叱られる  
蚊取粉へ母は焼香染みてゐる  
寛いだ涼みに父は帯もせず  
慰めてやれば又泣く女の子  
せぬ帯へ母さん／＼の愚痴を云ひ  
散歩して來いとは客の手前なり  
鉢巻ではたいした足の砂埃  
びつしやりと閉めて異見をする氣なり  
ほろ／＼として小兒科の扉をあけ  
本意なくかへすは先で添ふ氣なり  
それもなく守衛も笛の鳴るを待ち  
時々の駄賃に母の世辭を聞き  
氣の引けるものを干して子澤山  
叱られて椅子は妹のものになり  
兩足のしびれ故郷に遠からず

(川柳塔より)



ユニホーム中之島迄徒歩で来る 波 郎  
ラケットを尻へテニスの一休み 同  
盗壘へ夕日は既に落ちてゐる 路 郎  
高跳びの向ふに見える赤い屋根 同

化 粧 互 選

今すぐに出来化粧待たされる 長 人  
女房の化粧を見てる 長火鉢 同  
一二等待合室の濃化粧 しける  
化粧した姿へ鏡ちこ小さし 同  
口答へしながら化粧やつみ出来 春 三  
自動車の中は黙つた厚化粧 同  
はい誰方なき化粧の手を止ま 松 郎  
化粧も何處へ行くともなく女房 同  
紡績の休みに賣れる化粧水 松 雨  
化粧する鏡へ顔をニューツミ出 同  
夕刊の音を化粧は聞いたゞけ 飯 山  
お化粧も爽かにして臨御なり 萬よし  
化粧刷毛肩へ来てから母を借り 史 風  
腰巻のまま白粉の瓶を持ち わたる  
化粧して隣りの子供返すなり 蚊 十  
化粧した後子供へも塗つてやり 苦 可

應接に持たして化粧室へ来る 光太樓  
化粧した顔は見捨たもので無し 廣 賀  
ちこ塗つた顔でこちらを向く 紋 太  
タイピスト化粧たんびに素見 山 月  
逢まから化粧とウエートレス 馬 行  
鏡がわり序に女給塗つて来る 子 行  
覗かれて化粧片袖だけ通し 輝 翠  
鏡掛け軽くおろして薄化粧 波 郎  
白粉の其手で八百屋呼んで居り 眠 聲  
肺尖まきいた化粧の淋しすぎ 幽 香  
中庭の若葉が映る大鏡 世間亭  
薄化粧序に爪も剪つておき かほる  
東京へ着いて化粧か氣にかゝり 放 馬

新 店 紋 太 選

新店が出来ましたな二人連 廣 賀  
新店に電話の無いを不便がり 一 路  
新店のまだ間に合はぬ包紙 かほる  
新店を商賣敵覗きに來 長 人  
新店の奥に少うし派手な鬻 馬 行  
無茶苦茶に賣る新店邪魔がられ 蚊 十  
人だかり程に新店賣れぬらし 双 柳

新店の朝早くから水を打ち 二葉亭  
新店の紅提灯を突き上げる 子 行  
新店へ先つお馴染が來て呉れる 輝 翠  
新店に若女房の世辭がよし 古坂山  
新店のもうほつくと掛になり 眠 聲  
新店のしで紐ばかりよく目立ち 路 郎  
新店の庭に盛鹽少し溶け 幽 香  
葱一把添へし新店世辭がよし 同  
開業のその夜亭主の悲觀説 凡 平  
新店の店番はまだ馴れぬ顔 同  
新店の奥で景氣を氣にかける 刀 三  
新店が程度外れの世辭を言ひ 同  
新店で買ふて所を聞かれたり 光太樓  
新店の女將が一人馴れてゐる 同  
新店の中を覗いて風呂歸り 松 郎  
首巻をして新店の主じなり 同  
新店に漫講のやうな嫁がある 溪花坊  
新店に丁稚の座るここが無し 同  
新店のうつかり剩りを餘計出し 飯 山  
新店に明日の日和が氣にかゝり 同  
同業の眼に新店の賣れるここ 同  
(人)新店の出来たを丁稚知ま しける

(地)新店はそれもすぐ来ると云ふ  
(天)新店の紅提灯へ夜が来る 飯山

父 親 路 郎 選

父税は一年生の兄と寝る 助六  
 土地の世話又父親は請負ふて 喜泉  
 父親となつて内職一つ殖ね 實  
 飲み過ぎた親父へ子供遠ざかり 一聲  
 父親と来た事のある宿に着き 凡平  
 父親の酒が清書へちこほれ 飯山  
 自轉車の無心は父の方へする 放馬  
 本當の父は母丈け知つてゐる 世間亭  
 父親の駟コロロの音で止み 幽香  
 父親に向ひ正しい言葉也 松郎  
 長男の一字は父の名を貰ひ 松雨  
 父親のくせを母親おかしがり 子行  
 父親にそつくりですご宮詣り 山月  
 父親の手付が足袋の轡ぎに見ね 眠聲  
 花婚が早父親と意が合はず 竹榮  
 泣いてゐる涙を出さぬ父であり わたる  
 父親は六十までは働く氣 一路  
 極道の名も父親は呼んで死に 二葉亭

父親は苦學で今の地位に有り 双柳  
 嫁の肩持つて父親叱られる 東北  
 養太夫のおごで父親息をつぎ 廣賀  
 この父に抱かれし事を思出し 刀三  
 冷淡のやうな父親の意見にて 百石  
 やつとして父の心配事が知れ 馬行  
 父の顔見付けて心強い夜 同  
 父と子と犬と静かな日を送り 波郎  
 孝行へ父親今日も手を合はせ 同  
 父親の首では子供寝付かれず 古城山  
 父の眼に養女の大きく成つた事 同  
 泣き寝入りしたを父親ふびんも 春三  
 父親と知らず一家に引きさられ 同  
 父親はもう寄る年の愚痴を言ひ 史風  
 父親は敬見となつて座り替へ 同  
 父親が呑のば昔の唄になり 同  
 桐の木を植へたも父の愛にして 古城山  
 父親は先づ奉公にやる積り 双柳  
 人込みになるも父親よく叱り 廣賀  
 父親の留守は正座で食事なり 苦可

十 客

父親の膝は限るに堅すぎる 飯山  
 約束の日の父親に熱があり 凡平  
 戀人のやうにエブロン父に逢ひ 幽香  
 乗替へるまで父親に抱かれて居 二柳子  
 父親と黙つたまゝで差向ひ 光太樓  
 云ふさいた丈け父親の土産物 同  
 (人)これしきの金に喜ぶ父を見 刀三  
 (地)火の消らぬを父親柄んでゐる 莢豆  
 (天)一日を父うつ向いて居る 松郎

軸

(軸)父親に話手の本を頼まれる 路郎  
 父親の心配酒の呑めぬ事 同  
 家中を父親暗い顔にする 同

故零骨追悼會

日 二月廿四日午後六時  
 所 大阪西區八條通二丁目  
 築港託兒所樓上  
 題 「小兒科」(三句) 路郎選  
 費 參拾錢



# 川柳略語解補

西原柳雨

第十號の「川柳略語解」に洩れた分を見  
當り次第に拾録して見れば

いゝかんにだまりさゝは内儀也(明和六)  
いゝかんはいゝかけんの略ではないかこ  
思ふ嘘もいゝ加減にしておよしなさいこ  
は朝歸りの旦那の辯明に對する御内儀の  
反駁にやあらんか  
長局さまつを食ふに異ならず(明和六)  
さまつはさまつたけの略なるべく早松茸  
は本物に比すれば大味である是以上は説  
明を省く

輕井澤が機嫌にて行くところ(明和七)  
いぶばいぶろく十號の「村日待庄屋は

ぶをちさすごし」のいぶご同一であらう  
あんうけで鬼を飲む御供先(安永三)  
鬼ころは參州瀧鬼ころしなるべく餡掛豆  
腐で一杯遣る供待の下郎と思はる  
人音にミでもい所縫ひかゝり(安永四)  
ミでもはミさんでもの略であらうミ十號に  
『もてぬ奴ミでもない時語り出し』の例  
を上げて置いて説明して置いたが更に此  
句に接して愈々その臆説が間違ながらう  
ミ確信せしめたのである此句は蓋し飛ん  
だ處へ人の氣をいぶするので周章狼狽急  
に屋すまひを直して縫掛けた仕事に取掛  
りお柩でも逆に附けたミ云つたやうな場

合であらう  
野丸から上つて京へ大一座(安永五)  
野丸は吉野丸か、屋形船から山谷に上り  
吉原京町への總攻撃かと思はる  
秋風起つてやつば千すけ(明和六)  
やつばはやつばりの略かミおもはる人三  
化七の持參嫁が澤山の衣裳を土用中では  
干し足らず七月に入つてからまで掉に掛  
けて居るミの義であらう  
仕度金おききに困り抱て寝る(安永六)  
おききはおききこなるべく十號の「二百  
兩持つて行ききに困つてる」ものを引受  
け、以上はまさか藏の中へ入れて錠を閉  
めて置く譯にも行くまじやつば寢床に入  
れて抱いて寝る外はあるまい笑止  
美でおみやや附きも知られず(安永六)  
おみやややおみやや云ふこは普通一般  
にて必ずしも川柳には限らぬであらうが  
頗る附の別嬪であつて而も百兩も持つて  
来るミ云へば何か日くが無くしてはなるま  
じひよつミするミ丙午の亭主喰ひかも知

試合

井上劍花坊選

面白い程にも試合馴れてゐるす 薫流  
 試合見に孫の手首は折れるやう 木屑  
 咫尺ちる選手に泥の跳ねたまゝ 美の作  
 我れこそは何の何某太刀を抜き 一路  
 スバルタを足一バキに塗る出る 廣賀  
 亂取はさながゝ猫のじやれるやう 狸蒼  
 道場の音に武者窓暗くなり 乾坤  
 坊主にもならず試合にもならず 柳化坊  
 撃劔の試合最中紐が解け 柳八  
 行員で新任程の鮮かさ 山月

二三合手應へもなく次が出る 愚劣  
 敗けたのへよく戦つた戦かつた 吐露坊  
 グランドはメガホンの聲 薙旗 同  
 悠々ミ敗者の前を優勝旗 わたる  
 雷鳴もまじり試合は殺氣立ち 同  
 臺電の試合へ落弟生が出る 助六  
 生酔の一人試合へ夢中なり 同  
 試合から戻る電車は灯がこもり 凡平  
 電車から見る試合は旗ばかり 同

掛取り

岸本水府選

掛取りのこれが養子だなき思ひ 十字路  
 恥しい手で受取をして歸り 天魂  
 判取りの上へ釣銭置いて去に 山美

妾宅へ掛取りが来る別な用 薫流  
 取り込めば掛けは取りに来る 山月  
 五六軒掛取りですこ床屋出る 廣賀

れぬ油断すべからず

めりはめりやすの略、更に動詞化してめ

りやすを語るこぶ義の約語であらう銅

鑼和尚が天蓋か何かを肴に般若湯をあふ

りながら圍者の膝に靠れてきつても弾

きたまへこでれついでる裏面であらう

朝歸り笑く火で這へられず(安永四)

やはおやぢの略であらう

あこは父見附け次第に報告致しませうが

併し二三を除くの外これ等の略語は初耳

のもの多く只其一句限り便宜上に用ゐら

れたらぬが但しは一般普遍のものかは今

少し類句を集めて見れば分らぬ要するに

直ちに模倣することは考へ物であらうこ

思ふ

ある日の句會て

不知 讀人

路郎クン喧嘩せぬだけ年を取り

溪花坊一人タクシー呼んでゐる

二柳子クン會費あはてず横で讀み

掛取りの鼻緒がゆるむ午さがり 千代二  
 云譯に掛取り判を捺し乍ら 馬行  
 掛取りにだけ雪駄の音をさせ 同  
 掛取りへ子供の出来たを云ひ 眠聲  
 花道で掛取り同十謀し合ひ 同  
 奥様へ掛取りチカに申し上げ 一閑子  
 掛取りの世辭鉢植急の菊を賞め 同  
 書出しへ掛取り太い一を引き 不越  
 親方のものを掛取りねぎられる 同  
 掛取りの手へも廣告渡される 秀哉  
 掛取りの今日は戯談云はぬなり 同  
 掛取りの違算一月待たされる 二葉亭  
 美しい人に掛取り断られ 同  
 掛取りを歸へし兄弟喧嘩なり 蚊十  
 私からでも三掛取り歸へすなり 同  
 掛取りつて腰かけもせず碁の話 一舟  
 掛取りへ梅干貼つた女房が出 同  
 忍らひはね上げて掛取り戻り來 松郎  
 掛取りの眼にも帳場の落度なり 同  
 掛取りへ同情もする寒さなり しける  
 掛取りもつい同情をした話 同

車から降りて掛取り輕いじぎ 同  
 掛取り來ておさなしい戸を開 吐露坊  
 自分のも出し掛取り釣銭が出来 同  
 掛取りに來て色紙の畫を見る 同  
 行水に掛取り少し待たされる 夢六  
 掛取りは金庫の金を見て歸り 同  
 掛取りの財布羨ましく思ひ 同  
 掛取りへ明日休みかきいてみる 一路  
 お隣の拂ひ汚いことを言ひ 同  
 散髪屋丸刈五つ取りに來る 同  
 釣銭がなく掛取りの順が反れ 百石  
 掛取りの今日といふ今日口が過ぎ 同  
 掛取りに來れば忌の字が貼つて 同  
 掛取り見し番頭は露路へ呼び 潮風  
 女房へちこ氣の毒な請取書 同  
 掛取りが子猫をちやらす勝手口 同  
 毎度來る掛取りに母刷れたもの 琴月  
 掛取りに來て氣の毒な咳を聞き 同  
 掛取りを斷り膳の音をさせ 同  
 掛取りの愛想天氣をはめるだけ 一柳  
 掛取りの空しく歸る戸が閉り 同

伊達眼鏡かけて昔躰はやつて來る  
 刀三子馬行の膳を覗き込み  
 一聲もやがて靜かに作り出し  
 柳骨が双柳か双柳が柳骨か  
 からだちみにじつて頂戴かかほる  
 馬行から見るとみんあの喧しさ  
 腕組みをして松郎は承知せず

### 校正室より

▲近作柳樽の句が號を逐ふていゝ句になつて行くので嬉しく下たまらない。

▲殊に本號の近作柳樽に至つては全く佳吟絶唱をもつて滿載されてゐる私は校正

最中に幾度讀嘆の聲を放つたか知れない

▲きの作家も、きの句も皆生々として躍動してゐる。ほんごに各作家の生きた句

を見たときに私の血は湧き上がる。私は今諸君の心血を濺いだ句に接して諸君と共にある心地がしてゐる。

▲これからも引續いて個性の光つた句を見せて貰ひたいと思ふ(露)

# 川柳書架 (九)

代表句 川柳の作り方

(本村牛文錢著)

▼本書には序文も凡例もないから目次を列挙して内容の一端をうかがう資料とする。

第一篇 川柳とは何んならのか？

(一)川柳の前身(二)川柳の獨立(三)川柳の狂句(四)川柳の價值

第三篇 古川柳は何ういふ風に詠まれて居るか？

(一)可笑しみといふこと(滑稽)クスグ

り(二)穿ちといふこと(皮肉)埋屈

(三)軽味といふこと(洒落)平淡(四)三要素に關して(五)眞實味といふこと(六)寫實味といふこと(七)超越味といふこと

(八)感覺味といふこと

第一篇 川柳の形式(聲調)用語

(一)酒濁であること(二)説明體(三)「居

」(四)口語體(五)洒落體(六)「也

」(七)「來」(四)口語體(五)洒落體(六)「也

掛取に息子は髪を分けて出る 同

佳

掛取の女將表に連れがあり 百石

掛取へピアノ折々もれて来る 潮風

掛取へ二階の人も降りて来る 蚊十

掛取のもらへる家で釣銭がなし 琴月

電燈屋前に二度来た事を云ひ 鳶歩

掛取の言ひまくる氣へ支拂はれ 一舟

もつ早う來いと掛取叱られる 松郎

釋明に掛取の來る臺所 馬行

掛取に娘の口がもの足らず 雅幽

掛取へ心配のない酒の息 同

(五)掛取の仲居温習會も禁ぬ 松郎

(四)掛取の方も半金もみ手なり 雅幽

(三)會計へ掛取五六人並び 二葉亭

(二)掛取を云ふ亭主へ綱が出来 十字路

(一)掛取の八百屋我が字を讀む 馬行

## 柳川洲馬共選

棟梁が來たなま梯子から思ひ 松郎

釣銭が出来て掛取舞ひ戻り 同

掛取は表を開けた儘で立ち 同

掛取へ頭を下げる不仕合せ 一休

掛取の其日厚司をかへて出る 同

待つて居る間掛取帳を操り 同

掛取が將棋へ向いた好きな道 同

掛取りに同商賣の人に合ひ 助六

掛取りの残り丁稚が廻りされ 同

待たされる掛取り時間ごみる 同

掛取りは拂ふ氣配に元氣づき 同

乗換を持つて掛取三軒 雅幽

掛取の愚痴を炬燵で聞いて居り 同

銀行の時間も聞いて掛に出る 同

此雪になま、掛取いやがらせ 同

物堅い父掛取を入れさせず 喜花

掛取へ渡すに女念を入れ 同

掛取に出て若且の無分別 同

棒引ひて掛取禮に禮を言ひ 同

## 梯子

洲馬選

たまたまの程段梯子音をさせ 薫流  
 警鐘の高い梯子へ人だから 山月  
 二三段迄は上つた女の子 一柳  
 段梯子ナト腹の立つ上り様 竹榮  
 スリッパが二三度脱ける段梯子 喜花  
 お隣りの長い梯子を借りにやり 廣賀  
 羽子板を置いて梯子を登つて居 茶厘坊  
 繩梯子女を先きへおろすなり 一舟  
 出初式梯子へ今年の冷い風 しける  
 救命の梯子が下がるビルヂング 村夫  
 梯子をば下りる頭梁の赤い靴 十字路  
 裏梯子下りた所が便所なり 吐露坊  
 先代がかゝれたらしい梯子の字 一閑子  
 いろ譯を言ふて梯子を借り来る 吐露坊  
 何にか云うたが梯子へ顔を上げ 松郎  
 潜水夫水際迄の梯子かけ 山月  
 裏梯子降りるゝ廣いお庭先 喜花  
 梯子から見る三行儀の悪い屋根 馬行  
 (人)立置置いて男を呼びに来る 山美  
 (地)金槌の間に隣りを見る梯子 馬行  
 (天)梯子皆上らば用がたたる。 松郎

◆ 古城山選

小使に梯子を借りる事が出来 柳路  
 二三段までは上つた女の子 一柳  
 繩梯子女を先に降ろすなり 一舟  
 親且那すぐに梯子を持ってこさし 美濃守  
 借りて来た梯子を憐れ一寸借れ 眠聲  
 潜水夫水際までの梯子かけ 山月  
 張物に梯子を出したい、日和 竹榮  
 借梯子先づ自分だけ昇つて見 いさむ  
 もう少し届かず梯子諦める 夢六  
 大丈夫々々々々梯子を登り 山美  
 梯子まで逃げて舞妓は振返り 潮風  
 組立てる足場は梯子橋にされ 不越  
 修繕の梯子にポールうんこ下け 鳶歩  
 裏二階梯子は上げた儘に成り 村夫  
 看板屋梯子を少しにじらせる 十字路  
 裏梯子袴の裾がひつかゝり 喜花  
 先代が書かれたらしい梯子の字 一閑子  
 もう少ししかたく絞れさ梯子から 松郎  
 月が出て少し狼てる繩梯子 しける  
 いゝ、天氣梯子の上で唄に成り 吐露坊

「三」なり」(七)考へさせる句(八)形容  
 體(九)省略法(十)上達方  
 第四篇 川柳の作り方

(一)川柳味と天分(二)寫生(三)著者より  
 諸子へ○近代名句選

▲大正十三年十一月一日發行 菊半載三  
 六四(頁記事内容一五九頁)定價一圓二十

銭 發行所は大阪市東區住吉町二十八番  
 地弘文社

▲川柳入門書としては絶好の書である。  
 初心者も勿論論道の研究者にも好参考書  
 である。

大阪の世界筋

田舎紳士巡査に向ひ「世界筋とは何處に  
 あるか」その尋ね「堺筋ならあるが世界  
 筋と言ふのは大阪にありませぬ」「でも  
 八階の洋館の立つて居る處だ」巡査が「  
 多分堺筋と世界筋との間違ひだらう」こ  
 云へば田紳は堺筋を指して去つてしまつ  
 た。いづれ大夫殿に世界筋位は出来るだ  
 らう(柳の子)

梯子から梯子へ工夫聲を次ぎ同  
 通り庭梯子廻すに閑をいれ馬行  
 梯子から見るミ行儀の悪い屋根  
 梯子から落ちましたのミ松葉杖 琴月  
 降りて来る筈ミ梯子の下で待ら 同  
 位置かへた梯子に力入れて見る 助六

# 竹 竿

## ◆ 二柳子選

竿竹にまだ夕日有り灯がこもり 助六  
 交番の裏に竿竹長すぎる 同  
 竿竹が落ちて轉寢目をさまし 秀哉  
 吹降りに竿竹の落ちた音がする 同  
 竿竹の先が危ない熱し柿 愚劣  
 竿竹の一枚ごごにつかんで見る 蚊十  
 竿竹へ女房の聲下女の聲 吐露坊  
 竿竹を持たぬ遠い御轉宅 久樂  
 竿竹屋一本賣れて締め直し 一踏  
 竿竹の竿節から節で落ち 狸蒼  
 竿竹の雀へ危険せまるなり 駒人  
 竿竹を隣で借りる程洗ひ 凡平

打付の梯子に下稚馴れて居る 同  
 (秀逸)  
 何か云ふたかミ梯子へ顔を上げ 松郎  
 出初式梯子へ今年の風があり しける  
 (軸)  
 急がすミ女梯子で 聲を上げ 古城山

## ◆ 橋本一柳子 森田柳琴 共選

竿竹の柄をお向ひの褒めるなり 蚊十  
 子澤山干す竿竹の短かすぎ 木屑  
 竿竹を持たぬは遠い御轉宅 久樂  
 買ひだての竿棒飛に持ち行かれ 黙太  
 竿竹は昨日の儘で忘れられ 廣賀  
 引越の荷へ竿竹を邪魔がられ 乾坤  
 竿竹の事で長屋のさわがしい 柳化坊  
 竿竹の疵がすべりに引つかゝり 眠聲  
 竿竹の雀へ危険せまるなり 駒人  
 竿竹でまたいやな猫追ひ逃がし 柳人  
 竿竹が落ちて轉寢目をさまし 秀哉  
 竿竹の先きへ賣出し旗を下け 山月

# 嬉しい事と 悲しい事と

柳川洲馬

嬉しい事も、悲しい事も勿論川柳あつてのお話です。

戦後の影響か、震災の影響か知りませんが、近頃滅切の娯樂雜誌が殖わましたね。十四年になつてからでも「キング」ミが「世間」ミか云つた風に。そして何うです皆さん。殆ど總ての娯樂雜誌が異口同音に「川柳」を五圓乃至五十錢位の懸賞を以て募集してゐるではありませんか。そして仲々作家が多く、俳句や和歌なき、聊かの遜色もありません。嬉しい事ですなね。

○ まだ嬉しい事があります。夫れは「標語一ミか」「宣傳」ミか云つて巧に川柳が

竿竹の先きが危ない熱し柿愚劣 竿竹屋一本賣れて締め直し一路  
竿竹が家根に届いで羽子が落ち 同 曲つたのを竿竹屋値切られる 同  
竿竹で槍投げをして叱られる 助六 電線の風へ竿竹チト足らず 狸巻  
交番の裏に竿竹長すぎる 同 竿竹の竿節から節で落ち 同  
竿竹へ女房の聲下女の聲 吐露坊 妾室の竿竹足袋をトつ干し 凡平  
黙々とし、竿竹へ何か干し 同 竿竹を隣で借りる程洗ひ 同

## ▲零骨なる雅號

副略御免下被度酷寒の硯其の後先生の御風邪如何に存じ候哉御伺ひ申上げ候先日本  
田さん久し振、雷巢啞三味氏宅にてお目に掛り候扱し太田君の報に依り元同人の零  
骨死去の由驚き居る次第そも、零骨なる雅號が變な様に今に成つて思ひ居り候只遺  
憾なのは死ぬ迄同人で居て呉れ、ば良かつたのに、(勝手な文句乍ら)思ひ居り候何  
卒來月號の誌上に記事の餘白へ靈を慰めてやつて戴き度存じ候小生は先達ても申せし  
如く病氣で同人退きたるを立腹し抗議を申込んだのも水泡に歸したる次第妙な感じ致  
し居り候同人皆様に宜敷く御身大切に

(二二二十三日東京岩崎柳路より主幹宛)

## ▲社 告

前號に發表した特別募集句の入賞者並びに川柳家失敗談の筆者に對し全部賞品を贈呈  
いたしました(係)

應用される様になつた事です。其の作句  
を拜見するに皆立派な達吟だから驚くぢ  
やありませんか。

併し本屋の店頭を覗いて見るに俳句和  
歌の趣味雑誌は山程あるのに吾が川柳の  
雑誌は月夜の星、迄いきません。此れは  
一體何うした事です。未だ、發達し  
ないんでせうか。別に悲しいとは思ひま  
せん。發展への階段でせうから。

だか其の娛樂雑誌を見らる、五圓や三  
圓は未だしも、時々二百圓とか百五十圓  
とかの大金を呈上するに書いて川柳を募  
集してありますが、一體あれは何う云ふ  
の理現象なのですか、分りませんね。何  
んな心理だつて本屋は賣れ、ばい、のだ  
そうですが、其の選者の氣持は如何でせ  
う。

選者は依頼されるから無下にも辭ひか



# 小噺大學

春夏秋冬生

母 「お隣の義夫さんはなか／＼退院なさ  
ならん様ぢやがそんなにお悪いのか？  
息子 「なアに附添の看護婦が美人すぎち  
んですよ！」

◇

昔ある武士が、ある村を通過した時に、  
その村のある家に毎夜幽霊が出るに聞い  
て「これは面白い一つ退治てやらう」ミ

いふことになった。いよく棟木が三寸  
下らうといふ丑三つ時になつて、幽霊が  
出るに彼の武士平氣なもので  
「幽霊誠に濟まぬが旅費を五兩ばかり貸  
てはくれまいか」ミ云つたら流石の幽霊  
もすぐさま消れてなくなつた。

◇

花嫁 「あなたは私の齒が人齒であつても  
私をいつまでも見捨てはなさないで

ねて應じて下さるのでせうが、投句者の  
心は何う云ふのでせう。あはよくばうま  
うまに金二百兩を僅か、五錢の餌で釣る  
積りなのでせうね。嬉しに逢ひありま  
せん。月給以上ですすからぬ。

○  
或る作句者が懸賞でない川柳は馬鹿ら  
しくて句にならないと仰せられ、例會の  
出席は勿論、真面目な募集吟ミ云ふ方面  
から鬱鬱隠居して了ひました。そして蠟  
で鯛を釣る事を専門にしてゐられます。

○  
これでは川柳の真面目な雑誌は平々書  
店へ現れない筈ぢすね。何か目的が無け  
れば作句が出来ないのでせうか。三線  
が藝妓になる爲に必要に、川柳は金  
儲けの爲に必要なのでせうか。

○  
夫れにしても二百圓の選者があるから  
結構です。今に二百圓の選をするよりも  
二百圓の投げをした方が割がいい、ミ云

せうね」  
花婿「いや、それで私も安心した」  
ミ盛をはづして

「この禿頭でも決して見捨てはすまいね

近火で荷物を片附けだしたところへ、頰冠りをした男が一人手傳ひに来て、いきなり唐紙や障子をはづして運び出すので妻君は大聲で「手傳つて下さるなら此方の荷物を出して下さい。障子や唐紙は家主さんのだから……」といふに、その男苦笑して頰冠りを取るに、それは家主さんだった。

凹田「凸山くん、君の下宿の娘さんは素的な美人だね」

凸山「ウム、なか／＼の美人だが惜しい事には神經が少し鈍くてね」

凹田「神經が鈍い？」

凸山「鈍いだらうちやないか。僕も戀する機會がみんなに澤山あつたか知れないのちつとも感じないんだからね」

博士「地質學上から云ひますと、千年や二千年は殆んど勘定の中に入れない位なものです」

學生「ありがたい！ちやア先生、さうか僕に……その地質學的に百圓ばかり貸して下さい」

何處でもよく「無用の者ゐるべからず」  
といふ張札がしてあるが、あれはさういふ意味か僕には判らない

「よく物が紛失するからだよ」

「そいつあ、おかしいなア。泥棒だつて用があるからこそ這入るんぢやアないか

中學の運動會の假裝行列の中に一人の女學生が交つてゐた。謹嚴そのもの、教師は大いに驚いて、女學生に假裝した學生を列中から引つ張り出して

教師「何故許可してない女裝をしたんですか」  
詰問したところが學生は少しもわるびれず

學生「イヤ女裝ではありません、女裝をした男に假裝したのです」

ふ奥義に達しはしますまいか。

○  
そして賞品の無い例會は主催者丈の句會となり、賞品の多寡によつて川柳大會中會小會が開かれる様にでもなりそうです。そうするに會費を一錢でも澤山につて一錢でもいい、賞品を出せば、毎度無慮百數十名の出席請合ひです。

○  
大正××年×月 民法第××條  
に由り雜誌及句會の懸賞文藝募集を禁ず即日施行

てな法令が發布されます。するに川柳投句業者は上つたりです。悲しい事です。ね

○  
其の代り立派に川柳が開拓される様になります。此れこそ嬉しさの極みです。

(一四、一、九)



# 近作柳樽

路郎選

施してやる氣で爲替くんで居り	神戸	少女櫻	掛取を追ひ出してから鯛を焼き	同	同
もう娘胸でつんだりくづしたり	同	同	詫びて出る障子兩手で閉める也	同	同
何かくそ嫁の貯金を出した金	同	同	仕舞風呂この白粉もつけておけ	同	同
地を借りてまで蕪蕪をつくる氣が	同	同	ふみ襖あけるこ手紙まるめられ	同	同
喰べて出りや夜店すらりこ灯がこもり	同	同	荷車の先曳をするハーモニカ	同	同
好きこいやもろふてくれぬこもなし	同	同	おなじなら娘高島屋へゆく氣	同	同
男色こいわれ大いに憤り	同	同	双眼鏡も一度妻の手へ渡し	同	同
復讐は脊の子の飴さるこいふ	同	同	ブラジルは又ブラジルで熱をあけ	同	同
				室蘭	愚劣









# 編輯後記

△本誌は日に月に素派らしい勢ひで發展して参りました。發行部數も殖れば、愛讀者もすん／＼殖れてまゐりました。およろこび下さい。主幹の病中に書かれた萬年筆總横によつて多くの同情者があつた事を感謝して居ります。中には一言にお加へ下さいなごゝ洒落たことを云つて來た人もありました。

△本誌創刊一周年記念大會を二月二十三日夜、端の坊に於て開催いたしました。これ又頗る盛會でありました。會が果てゝから席を清水町の北むらに移し新年宴會を開きました。

△同二十五日第六支部主催で六甲、樂園

長春樓に於て、新年句會を催しました。句稿は次號で。

△柳誌「灰」を出しておられた松耶、刀三、馬行、光太樓の四君が今回灰川柳社を解散、擧つて入社されました。

△作句に熱心であつた二本幸堂氏が今度柳界に復活するに同時に、本社の人になられました。

△同人龜井花童子、去る一月二十七日商用で札幌へ旅行、同地北海川柳社では花童子氏のために歓迎句會を開かれたとのこと、同社の御好意を謝します。

△今井卯木氏は病後静養の爲め、伊豆修善寺温泉に滞在してゐられました。二月の末には歸還されるさうです。一日も早く快癒を祈ります。

△西田當百氏の御家庭に御不幸があつたさうです、お悼み申しあげます。

△故酒井零骨氏の追悼句會は二月二十四日午後六時から西區八條通二栗港託兒所で開催致しますから御出席を願ひます。

△二月十日夜川柳番茶會主催、神戸新聞社樓上で川柳講演會を開催されるさうです。本社より路郎先生始め、高橋古城山塚崎松郎の兩氏出演されることになつて居ります。盛會を祈ります。

△第十三支部會員、藪内窓月君去る一月廿一日新妻を、又同石田白菊君も本月十五日結婚されるさうです。共にお喜びいたします。

△武田彩霞氏は、武庫郡西灘村字河原花蓮検査所官舎十六の八へ、太田徹底郎氏は大阪市外鷺洲町海老江一二〇の四左近勇二方へ、小泉飛水氏は大阪市北區上福島北三丁目一〇六へ、岡篤歩氏は大阪市外豊崎町本庄八五二へ、共に轉居せられました。

△花童子選「除隊」選稿未着に付き次號で發表いたします。

△喜多小人君は柳人に、金川夢六君は佳鳴に、共に改號せられました。

△本號は主幹松耶、馬行、幸堂、私編、編輯いたしました。(一柳子)

▼本を漁つて歩くことは私の  
樂しみの一つだ。古本屋の棚  
の上から下まで、端から端ま  
ですつと目を通しますと、輕  
い勞れを覺えます。しかしこ  
の勞れは私のやうな古本屋巡  
りをするものに取つては實に  
愉快な疲れであります。

▼この疲れを覺れた時腰をお  
ろして話し込めるやうな家の  
あることはたまらなく嬉れし  
いものです。

▼公立社の主人公は、そんな  
時にいつでも心よく椅子を提  
供してくれる人です。諸君も  
私と同様に此處の主人公にお  
なじみになつて下さい。

▼商賣の方でも充分勉強して  
くれますから安心していゝと  
思ひます。まだおなじみでない  
方は是非一度立寄つてあげ  
て下さい。(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

**投稿規定**

- ▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。
- ▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』の封筒に朱記する。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼各地會報は清記のこゝ。
- ▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこゝ。

**募 集**

**第二卷第四號課題**

- 二月二十五日締切  
(各題二十句以内)
- ▼爪 齋藤松窓選
- ▼校長 大島濤明選
- ▼夜櫻 駒井美の作  
麻生腹乃共選

**第二卷第五號課題**

- 三月五日締切  
(各題二十句以内)
- ▼履歷書 森東魚選
- ▼鹽 竹田蘆穂選
- ▼朝風呂 林田馬行共選  
太田一聲共選

**每號募集**

- ▼近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 編輯局選
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

**價 定**

一部	參拾錢	(郵)
六部	壹圓六拾錢	(稅)
十二部	參圓	(共)

**料 告 廣**

特等一頁	五圓
普通一頁	三圓
半頁	二圓
一行	壹圓
參拾	拾圓
五拾	拾圓
參拾	拾圓
壹圓	拾圓

▼御送金は番替口座大阪三二一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼諒代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりご御指し願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は簡人宛にしない事

大正十四年二月十日印刷  
大正十四年二月十五日發行

第二卷 第二號  
(每月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎  
大阪市東區農人町二丁目七番地

印刷所 藤木兄弟社  
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發行所 **川柳雜誌社**  
振替大阪三二一四番

支店 大阪 明文堂 公立社 柳屋  
東京 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田  
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

# 川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

岩崎柳路 井上刀三  
 原史風 林田馬行  
 橋本二柳子 二木幸堂  
 西垣松雨 徳田双柳  
 龜井花童子 太田一聲  
 太田徹底郎 高橋かほる  
 高橋古城山 高見柳骨（入營中）  
 竹田蘆穂 武田彩霞  
 竹内多聞 塚崎松郎  
 宗清夜調 黒木莢豆  
 矢田石大臣 柳川洲馬  
 松本助六 駒井美の作  
 麻生葎乃 佐々木黙闇  
 宮内一洲 平井光太樓  
 森田輝翠 關本雅幽

- |       |                              |
|-------|------------------------------|
| 第一支部  | 大阪市西區八條通南小路<br>幹事 橋本二柳子      |
| 第二支部  | 大阪市北區南同心町二丁目四五〇<br>幹事 原史風    |
| 第三支部  | 岸和田市下野町四一九<br>幹事 太田一聲        |
| 第四支部  | 大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方<br>幹事 關本雅幽 |
| 第五支部  | 大阪市東區餌差町二二一番地<br>幹事 駒井美の作    |
| 第六支部  | 兵庫縣武庫郡六甲苦樂園<br>幹事 佐々木黙闇      |
| 第七支部  | 大阪市外南濱一八二<br>幹事 西垣松雨         |
| 第八支部  | 神戸市旭通二丁目八三<br>幹事 宮内一洲        |
| 第九支部  | 山口縣山口町石原小路<br>幹事 柳川洲馬        |
| 第十支部  | 神戸市中山手通二丁目九五<br>幹事 武田彩霞      |
| 第十一支部 | 東京芝區愛宕町一ノ六大成社内<br>幹事 岩崎柳路    |
| 第十二支部 | 函館市青柳町五〇<br>幹事 龜井花童子         |
| 第十三支部 | 大阪市外平野郷梅ヶ枝町五丁目<br>幹事 松本助六    |
| 第十四支部 | 朝鮮仁川仲町二丁目八<br>幹事 矢田右大臣       |

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(每月一圓十五日發行)  
大正十四年二月十日印刷 大正十四年二月十五日發行

第一卷 第二號

定價金參拾錢

